

「代用表現の再分類ならびに長距離束縛と 視点の関係についての一考察」

祐伯敦史

0. 導 入

それ自体で特定の指示内容を持たず、他の要素によってその指示対象が決定される表現を代用表現と呼ぶ。Noam Chomsky (1981; 1986; 1995) に代表される生成文法では、束縛理論と呼ばれる一連の原理の元、この代用表現の指示対象をどのように決定するかが大きな研究課題となってきた。また日本語の代用表現「自分」に関する研究も束縛理論の研究において非常に重要な役割を担ってきた。本稿では日本語の代用表現「自分」の性質を再検討し、生成文法で考えられているような典型的な照応形ではないことを主張する。また世界の様々な代用表現で見られる長距離束縛現象と視点の関係について、日本語の「自分」が示す性質がどのように関連するかを考察する。最後に言語習得研究との接点についても述べる。

1. 生成文法における束縛理論

生成文法は以下のように名詞要素を照応形、代名詞、指示表現の三つの要素に分類し、それぞれの表現の分布が以下の束縛条件に従うとしている。

- (1) 名詞要素
 - (a) 照応形 (anaphor)
 - (i) 再帰代名詞 (reflexive) (e. g. himself / herself)
 - (ii) 相互指示代名詞 (reciprocal) (e. g. each other)
 - (b) 代名詞 (pronoun) (e. g. him / her)
 - (c) 指示表現 (r-expression) (e. g. John / Mary)

- (2) 束縛条件A：照応形は局所的領域 (local domain) 内で束縛されていなければならない。

束縛条件B：代名詞は局所的領域内で自由でなければならない。

束縛条件C：指示表現は自由でなければならない。(Chomsky 1995: 96)

ここでの局所的領域とは概ね「文」(clause) と考えることが出来る。また、束縛 (bound) とは次のように定義できる。

- (3) 束縛の定義: α が β を構成素統御 (c-command¹⁾)し, α と β が同一指標をもつとき, α は β を束縛する。 β が束縛されていない時, β は自由 (free) である。(Chomsky 1995: 93)

以下の例文(4)では, 再帰代名詞 himself が主語の he によって局所領域内において束縛されるため文法的だと判断される。

- (4) he₁ (Queequeg) ... never troubled himself₁ with so much a single glance.²⁾

(Herman Melville *Moby Dick* chapter 10) [括弧内は筆者]

「彼はちらと振りむくこともしなかった。」(阿部知二訳 岩波文庫)

一方で, 以下のように, himself が束縛されていない場合(5), 或いは, 代名詞 him が local domain で束縛されてしまう場合(6), それらの文は非文法的だと判断される。

- (5) * Ishmael₁ claimed that I betrayed himself₁.³⁾

- (6) * Ishmael₁ betrayed him₁.

このように英語のデータを見る限りでは, 代用表現の分布は束縛理論によって説明できるように見える。次節では日本語の「自分」が三つの名詞要素のいずれに分類されるかを検討する。

2. 「自分」の基本的性質の再検討

日本語の代用表現「自分」は典型的な照応形で, 束縛条件 A に従うとされている (Saito 2002)。一般に「照応形」は次の三つの基準を満たす代用表現とされる (Cole, Hermon and Huang 2001)。

- (7)(a) 先行詞によって構成素統御されていること [構成素統御条件]
 (7)(b) 「文」の外の先行詞 (discourse antecedent) を許さないこと。[non-context 条件]
 (7)(c) VP-ellipsis で sloppy interpretation のみ得られること。[sloppy 条件]

では実際に「自分」が上で述べた性質を示すかどうか見てみよう。まず, 構成素統御条件について考えてみる。

- (8)(a) 太郎₁が自分₁の本を読んでいる。
 (8)(b) *太郎₁の弟が自分₁の本を読んでいる。

上の(8)(a)において, 「太郎」は「自分」を構成素統御しており, 先行詞の条件を満たしている。一方(8)(b)では, 「太郎」は「自分」を構成素統御しておらず, 先行詞と成り得ないことが説明される。

このように見てみると, 「自分」は構成素統御条件を満たすように思える。しかしながら, 「自分」の先行詞が構成素統御条件を満たさない文が少なからず存在する。例えば, 次の例文では「自分」の先行詞は「自分」を構成素統御していない。

- (9) [メアリーが自分₁を批判したこと]がジョン₁を打ちのめした。⁴⁾ (Akatsuka 1976)
 (10) [自分₁が癌でなかったこと]がヒロシ₁を喜ばせた。(ibid.)

これらの文に対して, 生成文法では深層構造で先行詞が照応形を構成素統御していると主張してきた。例えば, Belletti and Rizzi (1988) では, 以下のイタリア語の文において先行詞の Gianni が照応形の se を深層構造で構成素統御していると主張している。

- (11) [Questi pettegolezzi su di se₁] preoccupano Gianni₁ piu di ogni altra cosa.
 these gossip about himself worry Gianni more than any other else
 ‘These gossip about himself₁ worry Gianni₁ more than anything else.’

(Belletti and Rizzi 1988)

Saito(2002)も同じような立場を取り,束縛条件 A は文の派生(derivation)のいずれかの段階で満たされていれば良いとする anywhere condition であると主張している。

どちらの立場を取るにせよ,英語の照応形の場合のように「自分」が構成素統御条件を満たしているとは言えず,「自分」にとって構成素統御条件が絶対必要条件かどうかについては明確な結論が出ていないと言わざるを得ない。

次に「自分」が「non-context 条件」を満たすかどうか調べてみる。以下の例文では,「自分」が文を越えて先行詞「太郎」を取ることが可能であり,「non-context 条件」を満たしていない。

- (12) 太郎₁が怒っていた。花子が自分₁を批判したのだ。
 (13) 太郎₁は喜んでいて。花子₁がそのポストに自分₁を推薦したのだ。

これらの例文に対して,生成文法では空トピック(empty topic)が文頭に存在しており,照応形がそれらの空トピックを先行詞としているという主張がある(C.-T.-J. Huang 1984)。

- (14)(a) 太郎₁が怒っていた。(empty topic)₁ 花子が自分₁を批判したのだ。
 (14)(b) 太郎₁は喜んでいて。(empty topic)₁ 花子₁がそのポストに自分₁を推薦したのだ。

しかしながら,Yan Huang(2000)は空トピック仮説について,恣意的であると反論している。詳しくはHuang(2000)を参照の事。

最後に「sloppy 条件」について見てみる。まずは VP-ellipsis と sloppy interpretation の関係について英語を例に考えてみる。次の例文において,VP-ellipsis を含む二つ目の文は,sloppy interpretation と strict interpretation と両方を許す。

- (15) John₁ got in his₁ car. Bob₂ did, too.
 (16)(a) John got in John's car. Bob got in Bob's car. (X got in X's car)[sloppy interpretation]
 (16)(b) John got in John's car. Bob got in John's car. (X got in John's car)[strict interpretation]

一方で,照応形 himself が関係する場合,VP-ellipsis を含む文は sloppy interpretation しか許さない。

- (17) John₁ patted himself₁. Bob₂ did, too.
 (18)(a) John patted John. Bob patted Bob. (X patted X)[sloppy interpretation]
 (18)(b) John patted John. *Bob patted John. (X patted John)[strict interpretation]

このように英語の場合,照応形では「sloppy 条件」が満たされている。

それでは日本語の場合はどうであろうか。次の例文では,VP-ellipsis を含む二つ目の文では,sloppy interpretation が優勢である。

- (19) 太郎₁は自分₁の学生を推薦した。次郎₂もした。
 (20)(a) 太郎は太郎の学生を推薦した。次郎も次郎の学生を推薦した。
 (20)(b) 太郎は太郎の学生を推薦した。??次郎も太郎の学生を推薦した。⁵⁾

一見すると,日本語の「自分」は sloppy 条件を満たしているように思える。しかしながら次の文を見てみよう。次の例文(21)では,VP-ellipsis を含む二つ目の文は三種類の解釈を許す。ま

ず初めに「太郎」も「次郎」も「花子が花子の部屋で遊んでいる」と想像する解釈⁽²²⁾、次に、「太郎」も「次郎」も「花子が各々の部屋で遊んでいる」と想像する sloppy interpretation ⁽²³⁾、最後に「太郎」も「次郎」も「花子が太郎の部屋で遊んでいる」と想像する strict interpretation ⁽²⁴⁾である。⁽⁶⁾つまり、「sloppy 条件」に関しても完全な形で満たしているわけではないのである。

(21) 太郎₁は [花子₂が自分の部屋で遊んでいる] と想像した。次郎₃もした。

(22) 太郎は [花子が花子の部屋で遊んでいる] と想像した。

次郎は [花子が花子の部屋で遊んでいる] と想像した。

(23) 太郎は [花子が太郎の部屋で遊んでいる] と想像した。

次郎は [花子が次郎の部屋で遊んでいる] と想像した。[sloppy interpretation]

(24) 太郎は [花子が太郎の部屋で遊んでいる] と想像した。

次郎は [花子が太郎の部屋で遊んでいる] と想像した。[strict interpretation]

このように日本語の「自分」の性質を再検討してみると、生成文法で想定されているような典型的な照応形の条件を満たしおらず、照応形に分類できるとは言い難いように思える。次節では、このような性質と長距離束縛との関係について考察する。

3. 長距離束縛現象の再分類

前節では「自分」が生成文法で想定されているような典型的な照応形の条件を満たしていないことを確認した。本節ではこのような「自分」の曖昧な性質が、長距離束縛現象とも関連していることを見ていく。

ここで長距離束縛現象とは、以下の例文⁽²⁵⁾のように、代用表現が節を越えて先行詞を許す現象のことを指す。

(25) 太郎₁は [花子₂が自分_{1/2}の写真を見ている] と思った。⁽⁷⁾

この長距離束縛現象は世界中の様々な言語に存在することが明らかになってきている (Koster and Reuland 1991, Cole, Hermon and Huang 2001 等参照)。以下は中国語の *ziji* 'self' ⁽²⁶⁾、マレー語の *dirinya* 'self' ⁽²⁷⁾ が示す長距離束縛現象の例である。

(26) Zhangsan₁ zhidao [Lisi₂ renwei [Wangwu₃ zui xihuan ziji]] (Pollard and Xue 2001)

Zhangsan know Lisi think Wangwu most like self

'Zhangsan₁ knows that Lisi₂ thinks Wangwu likes him₁ / himself₂. most'

(27) raama₁ [tannu_{1/2} tumba jaaNa anta] heeLuttaane.⁽⁸⁾ (Amritavalli 2000: 57)

Rama self very clever COMP say-3SG

'Rama₁ says that self_{1/2} is very clever.'

ここ十年以上に渡って各言語の長距離束縛現象を説明するために様々な提案が行われてきた (Pica 1987, Koster and Reuland 1991, Progovac 1993, Cole and Hermon 1998, Cole, Hermon and Huang 2001)。そこで明らかになってきたのは、単一の長距離束縛現象と思われてきたものが、実はさらに下位分類する必要があるということであった。Cole, Hermon and Huang (2001) は、長距離束縛現象は三種類に分類されると主張している。まず初めのタイプは照応形が長距離束縛を示し

ている言語である。このタイプに属している言語では、照応形の三つの条件が満たされる。例えば、カンナダ語の *tannu* ‘self’ は、先行詞によって構成素統御される必要があり⁽²⁸⁾, *discourse antecedent* を許さず⁽²⁹⁾, VP-ellipsis では *sloppy interpretation* のみ許す⁽³⁰⁾。

(28) (a) * [*raamana₁ taayi*] *tannanna baida* Lu. (Amritavalli 2000: 64)

Rama-POSS mother self-OB scold-PAST

‘*Rama’s₁ mother scolded self₁.’

(28) (b) *raamana₁ tannanna_{1/2} muTTikoNDanu*. (ibid. 60)

Rama self-OB touch-VR

‘Rama’s₁ touched self_{1/2}.’

(29) *raama₁ [tannu_{1/2} tumba jaaNa anta] heeLuttaane*.

Rama self very clever COMP say-3SG

‘Rama₁ says that self_{1/2} is very clever.’ (Amritavalli 2000: 57)

(30) *raama taanu geddanu anta yendukoNDanu; shtaama nuu*.

Rama self win-PAST COMP think-PAST Shyama too

‘Rama thought self won, so did Shyama.’ (ibid. 100)

(= ‘Shyama thought Shyama won.’ (sloppy) / * ‘Shyama thought Rama won.’ (strict))

二つ目は、長距離束縛を許す照応形とされていたものが、実際には代名詞ではないかと思われるタイプの言語である。このタイプの言語の例として、マレー語の *dirinya* ‘self’ やヒンドゥー・ウルドゥー語の *apnee* ‘self’ が挙げられる⁽⁹⁾。以下に示す通り、*dirinya* は長距離束縛を許すが、先行詞によって構成素統御される必要はなく⁽³¹⁾, *discourse antecedent* を許し⁽³²⁾, VP-ellipsis では *sloppy interpretation* も *strict interpretation* も許す⁽³³⁾。

(31) [*Bapa Siti₂*] *tidak suka dirinya_{1/2/3}*. (Cole, Hermon and Huang 2001: xvii)

father Siti not like self. 3SG

‘Siti₂’s father₁ does not like her₃ / himself₁ / him₂.’

(32) *Ahmad₁ tahu [Salmah₂ akan membeli baju untuk diri-nya_{1/2/3}]* (ibid.)

Ahmad know Salmah will buy clothes for self-3SG

‘Ahmad₁ knows Salmah₂ will buy clothes for him₁ / herself₂ / discourse antecedent₃.’

(33) *John nampak dirinya di dalam cermin; Frank pun*. (ibid.)

John see self-3SG at inside mirror Frank also

‘John saw himself / him in the mirror and Frank did too.’

(= ‘Frank saw Frank in the mirror.’ [sloppy] or ‘Frank saw John in the mirror.’ [strict])

最後は、照応形とも代名詞ともはっきりと分類できないタイプの言語である。中国語の *ziji* ‘self’ はこのタイプに分類される。というのも、*ziji* は先行詞によって構成素統御される必要があり⁽³⁴⁾, VP-ellipsis では *sloppy interpretation* のみ許す⁽³⁵⁾という点では照応形の性質を示す。一方で、*discourse antecedent* を許す⁽³⁶⁾など、代名詞的な性質も示すためである。

(34) [*Zhangsan₁ de taitai*] *haile ziji_{1/2}*. (Cole, Hermon and Lee 2001: 7)

Zhangsan’s wife harmed self

‘Zhangsan₁’s wife₂ harmed *him₁ / herself₂.’

- (35) [S₁ Zhangsan kanjian ziji]; [S₂ Lisi ye yiyang] (Cole, Hermon and Lee 2001 : 27)
 Zhangsan see self Lisi also the same
 ‘Zhangsan saw himself and so did Lisi.’
 (= ‘Lisi saw Lisi.’ [sloppy] / ‘*Lisi saw Zhangsan.’ [strict])
- (36) Zhangsan₁ zhidao neijian shi yihou hen qifen, (Pollard and Xue 2001 : 329)
 Zhangsan knows that-CL thing after very angry
 Lisi₂ shuo neixie hua mingming shi zai he ziji zuodui.
 Lisi say words those obviously is being with self against
 ‘Zhangsan₁ was very angry after he learned that. By saying those words, Lisi₂ was
 obviously acting against himself₂ / him₁.’

このような観点から見ると、日本語の「自分」は最後のタイプに分類できるように思える。というも、前節で見たように、「自分」は(37)のようなタイプの文では構成素統御を要求し照応形の条件を満たす一方で、(38)のようにコンテキスト中の先行詞を指示可能という点では代名詞の条件を満たしているためである。さらに VP-ellipsis では、長距離束縛を含まない場合(39)は sloppy interpretation のみ許すのに対して、長距離束縛を含む場合(40)は sloppy / strict interpretation 両方を許容するためである。

- (37)(a) 太郎₁が自分₁の本を読んでいる。(=(8)(a))
 (37)(b) *太郎₁の弟が自分₁の本を読んでいる。(=(8)(b))
- (38) 太郎₁は喜んでいて。花子₂がそのポストに自分₁を推薦したのだ。(=(13))
- (39) 太郎₁は自分₁の学生を推薦した。次郎₂もした。(=¹⁰⁾(19))
 (= 次郎も次郎の学生を推薦した。[sloppy] /
 ?? 次郎も太郎の学生を推薦した[strict])
- (40) 太郎₁は [花子₂が自分の部屋で遊んでいる] と想像した。次郎₃もした。¹¹⁾
 (= 次郎は [花子が次郎の部屋で遊んでいる] と想像した。[sloppy])
 (= 次郎は [花子が太郎の部屋で遊んでいる] と想像した。[strict])

よって「自分」は「照応形」にも「代名詞」にも分類のしづらい中間的な要素であると結論づけることができると思われる。次節ではこのような「自分」の性質と近年注目を集めている「視点」の概念がどのように結びつくかを見ていく。

4. 「長距離束縛現象」と「視点」

前節で長距離束縛現象が三種類に分類されることを見たが、本節では意味・機能的な「視点」(logophoricity¹²⁾) がどのように長距離束縛現象と関連しているかを見ていく。「視点」とはその文の話者がどのような立場からその文を述べているかによって決定される。「視点」は概ね次のように定義される。

- (41) Logophoricity involves reference to an individual “whose point of view or general state of consciousness is expressed in the discourse”. (Clements 1975)

例えばアフリカのエウェ語 (Ewe) では、普通の代名詞と視点を取る代名詞の区別がある。

(42)(a) Kofi bé yé-dzó (Clements 1975)

Kofi say LOG-leave

'Kofi₁ said that he₁ left.'

(42)(b) Kofi bé é-dzó (ibid.)

Kofi say 3SG-leave

'Kofi₁ said that he₂ left.'

これらの「視点」と長距離束縛の関連について、Cole, Hermon and Huang (2001) は、照応形タイプの言語⁽⁴³⁾の長距離束縛には「視点」が必ず必要とされる一方、代名詞タイプの言語の長距離束縛は「視点」が必要ではないと述べている。例えばカンナダ語の tannu 'self' は前節で見たように照応形タイプの長距離束縛に分類されるが、その先行詞は発話されている内容について認識していなければならないとされ (Amritavalli 2000) ⁽⁴³⁾のように先行詞とされるものが死亡している場合などは容認性が低い。

(43)(a) ?sitte₂ tannannu_{1/2/3} kaaNalu bandaaga raaju₁ sattu hoogidda.

Sita self-OB to see came then Raju was dead

'Raju₁ was dead when Sita came to see self_{1/2}' (Amritavalli 2000: 104)

(43)(b) sitte₂ avanannu₁ kaaNalu bandaaga raaju₁ sattu hoogidda.

Sita he-OB to see came then Raju was dead

'Raju₁ was dead when Sita came to see him₁' (ibid.)

またマレー語の dirinya 'self' は前節では代名詞タイプの長距離束縛に分類されることを見たが、次の例文⁽⁴⁴⁾では文中以外の名詞を先行詞としており、その先行詞が発話の内容の意識してるかどうかは必要とされていない。

(44) [Bapa Siti₂] tidak suka dirinya_{1/2/3}. (Cole and Hermon 1998) (=31)

father Siti not like self. 3SG

'Siti₂'s father₁ does not like her₃ / himself₁ / him₂.'

これらのタイプの言語に対して、三番目のタイプすなわち典型的な「照応形」でもなく「代名詞」にも分類されないタイプの長距離束縛と「視点」の関係についてはどうだろうか？ Cole, Hermon and Huang (2001) は明確な結論を出しておらず、それぞれの言語によっても、その代用表現が出現している構造によっても違うのではないかと述べるに止まっている。よって次節では日本語の「自分」を例にとり、「視点」がどのように関連しているかを見ていく。

5. 「視点」と「自分」

日本語の「自分」と「視点」が関連があることは多くの研究者によって指摘されてきた。例えば Kuno (1987) は次のような組の例文⁽⁴⁵⁾ (46) を挙げ、それらの差が先行詞となるものが意識 (awareness) を有するかによって生まれると主張した (Kuno 1987: 255-256)。

(45)(a) 山田₁は、田中が自分₁を殺そうとした時、一言も声を立てなかった。

(45)(b) *山田₁は、田中が自分₁を殺した時、一言も声を立てなかった。

(46)(a) 河田教授₁は、自分₁の病状を気遣う人たちによって、温かく看病された。

(46)(b) *河田教授₁は、自分₁の死を悲しむ人たちによって、丁寧に葬られた。

そこで問題となってくるのは、「視点」がどこまで「自分」の指示決定に関連しているかである。先行研究では、大きく分けて三種類の立場が存在する。一つは、Cole, Hermon and Huang (2001) が主張するように、長距離束縛でのみ「視点」が関与しているという説である。この場合、長距離束縛以外は全て構成素統御などの統語要素によって指示対象が決まる事が予測される。二つ目としては、長距離束縛いかに関わらず全ての用例で統語規則以外にも「視点」が関係しているという立場である。¹³⁾ Iida (1996) はこの立場を取り、次のように主張している。

(47) The antecedent of *zibun* is understood as the perspective chosen by the speaker in describing the situation in question. (Iida 1996: 121)

この立場からは全ての「自分」において先行詞には「視点」が必要とされることが導かれる。最後の立場としては、「自分」には「視点」が関連している場合もあるが、そうでない場合もあるとする中間的な立場である (Reinhart and Reuland 1993, Aikawa 1993; 1994; 1999, Yuhaku 2002)。具体的には、同じ項構造 (coargument) の場合では統語的な要素が、それ以外では意味・機能的な「視点」が関与しているというものである。¹⁴⁾

具体的な例文を挙げて、三者の立場を比較してみよう。まず⁽⁴⁸⁾のような長距離束縛に関しては、三者とも共通して「視点」が関係していると主張している。

(48) 太郎₁は [花子₂が自分_{1/2}の写真を見ている] と思った。

次に長距離束縛以外の例文⁽⁴⁹⁾ (51)であるが、まず Cole, Hermon and Huang (2001) のような立場では、全ての例文において「視点」は関与していないということになる。逆に、Iida (1996) のような立場では、全ての例文において「視点」は関与しているということになる。一方中間的な立場では、⁽⁵⁰⁾のみ coargument 間の指示関係の為、統語要素によってのみ制御され、それ以外の例文では「視点」も関与している事が予測される。

(49) 太郎₁は自分₁の写真を見ている。

(50) 太郎₁は自分₁をさらけ出した。

(51) 太郎₁は花子に自分₁の写真を渡した。

三者の立場を「視点」が関与しているかどうかを表にまとめると、以下のような関係になる。

	Cole, Hermon and Huang (2001)	Reinhart and Reuland (1993)	Iida (1996)
(48)	logophoric	logophoric	logophoric
(49)	syntactic	logophoric	logophoric
(50)	syntactic	syntactic	logophoric
(51)	syntactic	logophoric	logophoric

次節では、これらの理論的立場と言語習得研究がどのように関連するかについて考察していく。

6. 言語理論と言語習得研究の接点

言語習得研究では、統語的な要素は非常に早い段階から発現し、意味・機能的な要素は記憶などの発達の影響を受けるため、習得が遅れるという主張がなされてきた (Borer and Wexler 1987, Grodzinsky and Reinhart 1993, Thornton and Wexler 1999 等参照)。例えば、次のような文では四歳から六歳の半数近くの児童が非文法的な解釈をしてしまう傾向があるが、McDaniel (2003) は音調面での認知発達が遅れるために、児童がそのような誤りを犯すと結論づけた。

(52) *Grover₁ is patting him₁.

これらの事実を踏まえ、Hestivik and Philip (2000) はノルウェーの児童を対象として、ノルウェー語において、どこまで「視点」が代用表現の習得に関与しているかを調べた。その結果、ノルウェー語では Cole, Hermon and Huang (2001) の予測を裏付けるような結果が出た。

但し、日本語では構造上の違いから Hestivik and Philip (2000) と同じ形式では実験は不可能のため、前節で挙げたような例文を用いて実験することにより、日本語の「自分」にどこまで「視点」が関与しているかという理論的問題を言語習得実験を通して検証できると言えそうである。

もう一度、前節で触れた例文を用いると、次のような予測が導かれる。もし日本語でも Cole, Hermon and Huang (2001) が主張するように、長距離束縛にのみ意味・機能的な「視点」が関与しているとすれば、(55)のみ習得時期が遅れ、(53)と(54)では同時期に習得される事が予想される。次に、Iida (1996) の主張が正しいとすれば、全ての例文に「視点」が関与していることになり、もちろん処理能力の負荷を考慮に入れる必要はあるものの、(53) (55)の文はほぼ同時期に習得することが予想される。一方、中間的な立場を取るとするならば、統語的要素によってのみ制御されている(54)の習得が一番早く、(53)ならびに(55)はそれより習得が遅れるという習得パターンが予測される。

(53) 太郎₁は自分₁の写真を見ている。(=49)

(54) 太郎₁は自分₁をさらけ出した。(=50)

(55) 太郎₁は [花子₂が自分_{1/2}の写真を見ている] と思った。(=48)

7. 結 論

本稿では、「自分」が照応形であるという立場を再考し、少なくとも従来想定されていたような典型的な照応形ではないことを示した。また長距離束縛と視点の関係について、言語理論と言語習得研究の接点についても論じ、理論的問題への言語習得研究の貢献についても触れた。

Notes

- 1) 構成素統御 (c-command) とは、概ね以下のように定義される。

α c-commands β if α does not dominate β and every γ that dominates α dominates β (Chomsky 1995: 35)

- 2) 数字の指標 (index) は、代用表現の先行詞を示す。
- 3) * はその文や、その指標での解釈が非文法的ということを示す。
- 4) この文は「メアリーがメアリーを批判したことがジョンを打ちのめした」という解釈も許すが、本文の解釈の方が優位である。
- 5) ?? は非文ではないにせよ、容認性が低いことを示す。
- 6) 日本語の「自分」の sloppy / strict interpretation については、Hoji (2003) も参照。
- 7) 逆に、同一節内での指示関係を、局所束縛 (local binding) と言う。この例文では「自分」は「花子」を先行詞とする局所束縛も成立する。
- 8) 本稿で用いた略号は以下である。

SB = subject, OB = object, POSS = possessive, PAST = past tense, VR = verbal reflexive, SG = singular, COMP = complementizer, 3 = third person, LOG = logophoric

- 9) ヒンドゥー・ウルドゥー語 (Hindu-Urdu) に関しては、Davidson (2000) を参照。
- 10) Aikawa (1993) は次のような例文では VP-ellipsis で sloppy / strict interpretation 両方の解釈が得られるとしている。

(i) ジョンは自分の車に乗った。トムもだ。

(=トムはトムの車に乗った [sloppy] / トムはジョンの車に乗った [strict])

しかし、この文では「乗った」という動詞が用いられており、verbal noun ではないために VP-ellipsis は成立していないという指摘もある。詳しくは Takahashi (2000) を参照。

- 11) ここでは、「次郎は [花子が花子の部屋で遊んでいる] と想像した。」という解釈は考慮の対象外としておく。
- 12) 研究者によって、視点を logophoricity (Clements 1975) としたり、empathy (Kuno 1987) としたり、perspective (Iida 1997) と様々に表現したりしているが、代用表現の説明には、形式的な要素だけでなく、意味機能的な要素も関係していると言う点では一致しており、本稿では logophoricity で統一することにする。
- 13) Iida (1996) はさらに以下のような O (bliqueness) command も働いていると主張している。

(i) O-command: X o-commands Y just in case X is a less oblique coargument of some Z that dominates Y. In case Z=Y, X is said to locally o-command Y.

(ii) When *zibun* and its antecedent are coarguments, *zibun* may not o-command its antecedent.

- 14) 項構造とは以下のようなものである。以下の(i)においては、主語と目的語は一つの動詞により「格」(case) や意味役割を与えられており、coargument となる。それに対して、(ii)の「太郎」と「次郎」は「母親」という要素が中間に存在しているため coargument ではないとされる。

(i) [太郎は][次郎を]褒めた。

(ii) [太郎の][母親は][次郎を]褒めた。

References

- Aikawa, Takako. "Reflexivity in Japanese and Lf-Analysis of Zibun-Binding." Ph. D. dissertation. The Ohio State University, 1993.
- . "Logophoric Use of the Japanese Reflexive Zibun-Zisin 'Self-Self.'" *MIT working Papers in Linguistics* 24 (1994): 1-22.
- . "Reflexives." *A Handbook of Japanese Linguistics*. Ed. Natsuko Tsujimura. Oxford: Blackwell, 1999.
- Akatsuka, N. "Reflexivization: A Transformational Approach." *Syntax and Semantics 5: Japanese Gen-*

- erative Grammar*. Ed. M. Shibatani. New York: Academic Press, 1976. 51-116.
- Amritavalli, Rita. "Lexical Anaphors and Pronouns in Kannada." *Lexical Anaphors and Pronouns in Selected Asian Languages*. Eds. Barbara C. Lust, et al. Berlin: Mouton de Gruyter, 2000. 49-112.
- Belletti, Adriana, and Luigi Rizzi. "Psycho-Verbs and Theta Theory." *Natural Language and Linguistic Theory* 6 (1988): 291-352.
- Borer, Hagit, and Kenneth Wexler. "The Maturation of Syntax." *Parameter Settings*. Eds. Thomas Roeper and Edwin Williams. Vol. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1987. 123-72.
- Chomsky, Noam. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris, 1981.
- . *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*. New York: Praeger, 1986.
- . *The Minimalist Program*. Cambridge: MIT Press, 1995.
- Clements, G. N. "The Logophoric Pronoun in Ewe." *Journal of West African Linguistics* 10 (1975): 141-77.
- Cole, Peter, and Gabriella Hermon. "Vp-Ellipsis and Malay Reflexives." *Proceedings of the Thirteenth Annual Conference of the Israeli Association for Theoretical Linguistics* 5 (1998): 39-54.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon, and C.-T. James Huang, eds. *Long-Distance Reflexives*. Vol. 33. San Diego: Academic Press, 2001.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon, and Cher Leng Lee. "Grammatical and Discourse Conditions on Long Distance Reflexives in Two Chinese Dialects." *Long-Distance Reflexives*. Eds. Peter Cole, Gabriella Hermon and C.-T. James Huang. Syntax and Semantics. San Diego: Academic Press, 2001. 1-46.
- Davidson, Alice. "Lexical Anaphora in Hindi-Urdu." *Lexical Pronouns and Anaphors in Some South Asian Languages: A Principled Typology*. Eds. B. Lust, et al. Berlin: Mouton de Gruyter, 2000.
- Grodzinsky, Yosef, and Tanya Reinhart. "The Innateness of Binding and Coreference." *Linguistic Inquiry* 24 (1993): 69-101.
- Hestvik, Arild, and William Philip. "Binding and Coreference in Norwegian Child Language." *Language Acquisition* 8 (2000): 171-235.
- Hoji, Hajime. "Surface and Deep Anaphora, Sloppy Identity, and Experiments in Syntax." *Anaphora: A Reference Guide*. Ed. Andrew Barss. Oxford: Blackwell Publishing, 2003. 172-236.
- Huang, C.-T. James. "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns." *Linguistic Inquiry* 15: 4.4 (1984)
- Huang, Yan. *Anaphora: A Cross-Linguistic Study*. Oxford: Oxford University Press, 2000.
- Iida, Masayo. *Context and Binding in Japanese*. Stanford: CSLI Publications, 1996.
- Koster, Jan, and Eric Reuland, eds. *Long-Distance Anaphora*. Cambridge: Cambridge University Press, 1991.
- Kuno, Susumu. *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago: The University of Chicago Press, 1987.
- McDaniel, Dana. "Two Pronominal Mysteries in the Acquisition of Binding and Control." *Anaphora: A Reference Guide*. Ed. Andrew Barss. Oxford: Blackwell Publishing, 2003. 105-26.
- Pica, Pierre. "On the Nature of the Reflexivization Cycle." *NELS* 17 (1987)
- Pollard, Carl, and Ping Xue. "Syntactic and Nonsyntactic Constraints on Long-Distance Reflexives." *Long-Distance Reflexives*. Eds. Peter Cole, Gabriella Hermon and C.-T. James Huang. Vol. 33. San Diego: Academic Press, 2001. 317-42.
- Progovac, Ljiljana. "Long-Distance Reflexives: Movement-to-Infl Versus Relativized Subject." *Linguistic Inquiry* 24 (1993): 755-72.
- Reinhart, Tanya and Eric Reuland. "Reflexivity." *Linguistic Inquiry* 24 (1993): 657-720
- Saito, Mamoru. "Phase Theory and Cyclic Interpretation of Chain." *Eigo Seinen (The Rising*

Generation) August 1 2002: 278-84.

Takahashi, Mari. "The Syntax and Morphology of Japanese Verbal Nouns." Ph. D. dissertation. University of Massachusetts, 2000.

Thornton, Rosalind, and Kenneth Wexler. *Principle B, Vp Ellipsis, and Interpretation in Child Grammar*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 1999.

Yuhaku, Atsushi. "Research Notes on The Ambivalent Nature of Japanese *Zibun*" *Core* 32 (2002)

Abstract

This paper reexamines the basic properties of pronominal forms including Japanese *zibun* ‘self’ and shows that there is need to reclassify them contrary to the standard position of generative grammar. It also shows that there are three types of Long-Distance binding and explains how they are related with logophoricity. Lastly, it mentions what it will imply for language acquisition studies.